

「学習支援センター」：工学院大学の場合

1. はじめに

近年、教育制度改革や入試制度の多様化によって、入学してくる学生の学力の幅は年々広がっている。基礎学力に不安のある学生が大学での授業を理解するのに必要な力をつける手助けをするために、工学院大学・学習支援センターは2005年5月に設置された。学習支援センターでは、数学・物理・化学・英語の4教科の個別相談を中心に、さらにそれを充実させるものとして基礎講座を開講している。センターは八王子と新宿の両方に設置されており、八王子キャンパスでは2005年5月から、新宿キャンパスでは2005年9月から専属の講師が常駐し、設置からの利用は両キャンパスで約4500件であった。

2. 学習支援センターについて

工学院大学は、八王子キャンパスと新宿キャンパスがあり、八王子には第1部の1,2年生、新宿には第1部の3,4年生と第2部の学生が主に通学している。どちらにも学習支援センターがあり専任講師がいる。八王子には数学3人（前期は2人）、物理4人、化学2人、英語2人の講師がおり、新宿には各科目に1名の講師がいるが、講師の勤務日は週に3日～5日で講師によって違う。センターの開室時間は、学生の授業時間に合わせて八王子は11時～19時、新宿は16時～22時となっている。センター講師の仕事は、主に基礎講座の開講と個別相談の対応である。ここでは八王子キャンパスの数学の学習支援について紹介する。

3. 基礎講座

基礎講座は高校数学の習熟度が低い学生を対象として開講した。入学後全員に高校数学の習熟度調査を実施し、約1200人中57人を受講対象者とした。もちろん、受講対象者以外の学生にも受講を勧めたが、延べ人数で、前期146人、後期57人、年間203人と受講者は少数に止まった。半期ごとに、大学の数学の授業を理解するために必要な、基礎知識の習得を目標に講義を行った。

3.1 前期

大学の数学の授業を受けるために必要な高校数学の習得を目標に、数学 クラスと数学 クラスの2クラスを開講した。数学 クラスでは高校の数学 と の内容、数学 クラスでは高校の数学 と の内容から、大学で学習する数学に必要な単元をピックアップし、1回50分の授業を行った。数学 クラスは3クラス、数学 クラスは1クラスを開講した。

3.2 後期

微分積分入門クラスでは前期の数学 クラスの続きで、大学の数学 を学習するために必要な関数の講義を行い、最後の数回は大学の数学 の定期試験対策を行った。微分積分クラスでは大学の数学 の再履修者のために1変数の微分積分の講義と幾何学 の定期試験対策を行った。定期試験対策は学生からの要望を取り入れた。微分積分入門クラスは2クラス、微分積分クラスは1クラスを開講した。

3.3 評価

前期の出席者は43人いたが最後まで続けて受講した学生は15人（受講対象者6人を含む）、後期の出席者は8人、最後まで受講した学生は5人（受講対象者3人を含む）であった。受講者数は少ないが同じ学生が続けて受講し、授業態度は非常に熱心だった。気がかりな点は基礎講座を受講する学生は個別相談に来ないということで、講師と1対1になるより授業形式の方がいいという学生がいるようだ。受講者が少ない理由として次のことが考えられる。

- 授業内容
学生は高校の復習ではなく、即、大学の授業に結びつく授業内容を希望している。
- 開講時間
授業が空いている時間は5時限目なので、16:30からの開講になってしまう。最初は出

席していた学生も帰ってしまったり、レポート等に追われて欠席しがちになる。後期になると、5時限目に再履修科目が入っているため、基礎講座の受講を必要としている学生が受講できない。

対策としては次のことを考える。

- 高校で学習する数学の基礎知識をさらに養成する必要があるが、大学の授業を受けながら高校の内容を再度学習し直すということは、学生にとって魅力のないものである。基礎講座の内容は高校数学を基本として大学数学を大幅に取り込んだものとする。
- 基礎講座の存在を学生に知ってもらう。
- 大学の授業担当教員に基礎講座の受講を勧めってもらう。
- 基礎講座の出席に、なんらかの付加価値（例えば、大学の授業のレポート点に加えてもらう）をつけることに関して、大学の授業担当教員と協議を続ける。

4. 個別相談

個別相談は学生相談室で講師が待機し、学生の要求に何時でも対応できる体制であり、相談予約をすることも予約無しに立ち寄る事もできる。センター講師は毎日1~2名で対応し、相談件数は年間1314件で月平均169件、利用者は前期184人、後期212人、通年305人だった。相談内容は高校数学、大学基礎数学、専門課程の数学、プログラミング等、多岐にわたった。個別相談する際、1件毎にカルテを記入しそれを集計し相談状況の把握に役立てている。

4.1 相談科目

必修科目である数学に関する相談が64%、学科によっては選択科目である線形代数学は15%、専門の数学が10%、数学以外の情報・物理が4%、高校数学が1%、編入試験・大学院入試が3%であった。高校数学を相談する学生はほとんどなく、大学の必修科目の相談が中心だった。

4.2 相談時間

30分以下が50%、60分以下が27%、90分以下が12%、120分以下が6%、120分を超えるものが5%であった。相談内容がはっきりしている場合は短いですが、試験直前に半年分の内容を全部教えて欲しい等、長時間になる場合もあった。

4.3 相談回数

ひと月の相談回数は、1回の学生が55%、2回が23%、3回が9%、4回が6%、5回以上が7%であった。月に1回程度しか相談に来ない学生が半数以上であった。

4.4 相談理由

センターに相談に来る理由は、中間または定期試験が48%、レポート提出のための20%、授業の復習が19%、解法についてが7%、自習が6%であった。試験やレポートのための相談が70%近くを占め、必要に迫られて相談に来る学生が多いことがわかる。

4.5 評価

- 本当に相談が必要な、高校数学の知識に乏しい学生が相談に来ない。
- ほとんどが大学の授業に関する相談で、それも解法よりはレポートの解き方、試験勉強に関することである。
- 予約をして相談に来る学生は週に1~2人程度とほとんどいない。切迫して相談に来る学生が多いようだ。
- 試験間際やレポート提出のための相談が非常に多い。大学の授業で必要に迫られないと勉強に手をつけられないようだ。
- 大学の授業に出席せず、センターで学習する学生がいた。
- 後期になると、大学での学習方法や試験の受け方の要領を覚え、また高校生とは違う大学生活の自由な過ごし方からか全般的に学習意欲が薄れてきているようである。

5. アンケート調査

2005年12月に八王子キャンパスの1年生を対象にアンケート調査を行った。このアンケートは4教科すべてを対象としている。学習支援センターを利用したことのある学生399名、利用したことのない学生433名からのアンケート結果の一部を紹介する。

5.1 センター利用者

「説明の内容は理解できたか」、「説明は期待した内容と合致したか」、「利用して大学の講義・実験の理解等に役に立ったか」という設問に対して、どれも80%前後でよい回答が得られた。

5.2 センター利用経験なし

「あなたがセンターを利用しない理由は何ですか。(複数回答可)」という設問に対して、499回答のうち、177回答は「センターについてあまり知らない」であった。学生にセンターの存在を周知させることが課題としてあげられる。また、「利用したいが時間帯が合わない」と「利用する時間的余裕がない」を合わせて226回答だった。1年生は必修授業の数が多くレポートに追われている学生もあり、授業の復習や自習をする時間がないようだ。

6. 今後の課題

約1年間学生の指導をして、繰り返し利用している学生の中には自分で学習する力を養い、センターから巣立っていく学生もいる。授業担当教員には聞きづらいようなことをセンターでは相談できるという評価もあり、センターの存在について一定の評価はできそうだ。しかし、学習支援センター利用者の多くは相談の内容がはっきりしており、設置当時の目的である何を相談したらいいかわからない、勉強の仕方がわからないといった学生を指導することはほとんどなかった。今後は、基礎学力の必要性を学生に知ってもらい、退学や留年を最小に止められるようセンターの利用を促していきたい。そのためには授業担当教員の協力も不可欠である。授業担当教員からセンターの利用を促してもらい、またいち早く授業の様子やレポートの内容、中間試験の予定等の情報を提供してもらえれば、よりよい対応ができるように準備し特別講座を設けることもできる。センターからは授業担当教員へ、学生からの相談の内容や躓きを報告し、センターの様子を知ってもらえるような工夫をする必要があると考えている。

不登校や留年を悩む学生からの相談が数件あった。これらの学生に対応するために、カウンセラーと連携し対応するというのも1つの課題である。

(文責 神志那陽子, 工学院大学学習支援センター)
kt13116@ns.kogakuin.ac.jp